



重要文化財 伝千手観音立像  
平安時代 像高200・0cm  
(木之本町黒田 観音寺蔵)

## 「観音の里」長浜

仏教文化財の宝庫である長浜には多くの仏像が伝わり、古くは奈良・平安時代に遡るものも多数あります。

「近江を制する者は天下を制す」といわれ、湖北の地も幾多の戦乱や災害に見舞われましたが、その度に観音像は村人の手によって難を逃れ、今日まで大切に守り継がれてきました。

長浜の観音さまは、格式高く祀られているのではなく、そのほとんどは集落内の質素なお堂につつましく安置されています。どんな時も自分たちの暮らしの中で守ってきたからこそ、村人たちは「うちの観音さん」と親しみを込めて呼び、そんな姿が今なお残っているのが長浜の「観音の里」たるゆえんです。

一方で、その伝承には、**少子高齢化による後継者不足や観音堂の老朽化**などといった、時代の移り変わりによって発生した課題があります。しかし、観音文化の継承が困難になりつつありますが、村の観音さまを大切に思う気持ちは、時を経て変わっていません。

この特集では、いくつもの課題を

抱えながらも、長浜を象徴する独自の観音文化とその誇りを次代につなごうとする地域の取り組み事例を見ながら、観音の里の未来を考えます。

## 村人の慈愛伝える「いも観音」

長浜の観音さまの中でも、その姿で目を引くのが、「いも観音」とよばれる観音像。手や足を失い、鼻や口の形も分からないほど朽ちています。が、痛々しいその姿には、村人たちの慈愛に満ちた物語があります。

織田信長の比叡山の焼き討ちの際、木之本町黒田の「安念寺」も兵火にかかり堂宇が焼失。しかし、仏像は村人たちの手でいち早く運び出され、門前の田の中に埋めて隠され、焼失を免れたと伝えられます。掘り起こされた仏像は近くの余呉川で洗ひ清められ、仮堂に安置。「いも観音」の名の由来は、洗う様子がイモ洗いのようであったことや、疱瘡(いも)がさや皮膚病を治す身代わり観音として拜まれていたことなど諸説ありますが、今も村人たちは親しみを込めて「いも観音さん」と呼んでいます。

# 特集 観音の里 祈りとくらしの文化

## 村人たちの挑戦 発信で広がった支援の輪



風化し、縁の下部が朽ちかけていた  
安念寺(木之本町黒田)の観音堂。



市内外から集まった支援により、  
見事に改修。



その朽ち果てた姿から、戦禍の烈しさと  
村人たちの深い慈愛が感じられる。



安念寺いも観音保存会の皆さんと  
“観音ガール”対馬佳菜子さん

## 安念寺の挑戦 クラウドファンディング

「長い間、村をお守りくださっているいも観音さんに、いつも感謝しています」と語るのは、いも観音を後世に伝えたいと結成された「安念寺いも観音保存会」代表の藤田道明さん。いも観音の姿を見ながら育ち、その存在に親しみをもちながら観音さまを守っています。頭を悩ませていたのが**観音堂の老朽化**。全体的に風化が進み、縁の下部が朽ちかけ、10軒の村人たちが**観音堂の改修費用を負担する**のは、容易ではありませんでした。

そこで保存会が挑戦したのは、インターネットやSNSといった手段で支援者を集めて寄附を募る「**クラウドファンディング(CF)**」。「観音ガール」として活動する対馬佳菜子さんが、サポーターとして募集の運営や広報を担い、保存会のメンバーの挑戦を支援しました。

その結果、いも観音を後世へ伝えたいという思いが多くの人の心に響き、**200万円という目標を大幅に上回る550万円**余りの寄附が集まりました。

また、CFでは寄附金以外にも多くのものでいただきました。寄附金とともに多くのコメントが添えられ、「コロナ禍で観音さんに会えなくて淋しいけど、CFで縁を作っていただけ嬉しい」、「もっと力になりたい」など、そこには観音さまへの想いが綴られていました。「うちの観音さんは、よそに住む人にとっても大切な観音さん。これからもしっかりお守りたい」と、世話方の皆さんにとって大きな励みをもたらしました。

また、市民の皆さんからの寄附が最も多く、次いで首都圏や都市部から多く集まったことから、観音さまを後世に伝えていきたいという地元の願いが強いこと、そして、長浜の観音さまが都市生活者にも大きな心の拠り所となっていることが判りました。